

第一貨物（山形市、武藤幸規社長）は、環境保全対応の一環として、廃食油を燃料にした長距離トラックのテスト運行をスタートさせた。てんぷら油などの廃食油から精製する一般的なバイオディーゼル燃料（BDF）は、製造コストが導入のネックとなっていたが、同社は精製工程を簡素化して生産効率を高め、技術により独自のシステムを開発。環境対応と経費削減を両立できる実効性のあるビジネスモデルとしての展開を目指していく。

第一貨物（山形）

武藤社長が26日、天童市の第一貨物中央研修所で記者発表した。一般的なBDFは廃食油とメチルアルコールを混合させた上、触媒の水酸化ナトリウムでグリセリンを除去して燃料に精製している。同社でも山形市内を走る集配トラック5台については従来のBDFを燃料に運行しているが、グリセリンの廃棄処理や燃料の供給体制が未構築という課題を抱えていた。

今回導入した燃料の精製技術は米国が発祥。回収した廃食油を遠心分離装置を使って1段階レベルの不純物までろ過し、そのままタンクに給油できる。工程が簡素なので時間当たりの製造能力は従来の3倍になり、コストの削減にもつながる。同社の試算では軽油に比べ燃料費が12・3%削減できるという。また、運行するトラックについても独自の改良を施し、一般の軽油燃料を入れるタンクと、廃食油用のタンクの二

精製簡素化の独自システム

廃食油で長距離運行

つを搭載。低温時の廃食油は粘度があるため、エンジンが温まるまでは軽油で走り、温度が安定してきたら廃食油に切り替える機能を持たせた。

今回採用した廃食油燃料は、米国では一般車両にも普及し始めているが、国内で長距離輸送に採用するのは初めて。現在、山形―北関東間で20台トラック2台を試験運行させている。武藤社長は「環境対策は表面的な取り組みでは意味がなくて、収益を確保する手段として経営戦略の根幹に組み入れる必要がある。将来的には環境対応力が企業の競争力になる」と強調。発表ではタイヤメーカーのブリヂストンと開発したエコタイヤシステムや低公害車の導入などの取り組みも説明した。



低コストで精製できる廃食油燃料で走行する長距離トラック

山形市・第一貨物中央研修所

エコと経費削減 両立めざす